

## 第1回文化芸術に関する意見交換会

- 1 日 時 令和3年12月20日(月) 10時00分～12時00分
- 2 会 場 ときわ会館5階 中ホール
- 3 出席者 (敬称略、五十音順)
- (1) 委員  
あらい太朗、新井久夫、市橋大、小田慎也  
加藤崇寿[晴彦]、小泉文、小林桂子、渋谷七恵  
関井一夫、坪内間、遠山昇司、浜雅俊  
村上和夫、吉原浩
  - (2) 事務局  
スポーツ文化局 大西局長、野口部長  
文化振興課 吉田課長
  - (3) 欠席者  
あらい太朗
- 4 公開・非公開の別 公 開
- 5 傍聴人の数 12人
- 6 内容
- (1) 開 会
  - (2) 委嘱状交付
  - (3) 挨拶
  - (4) 委員紹介
  - (5) 事務局紹介
  - (6) 委員長・副委員長の選任
  - (7) 報告・意見交換内容
    - ①さいたま市文化芸術都市創造計画(前期計画)の  
令和2年度施策集について
    - ②さいたま市文化芸術都市創造計画(令和3～12年度)  
の重点施策について  
(次回さいたま国際芸術祭、アーツカウンシルの創設、  
美術館等文化芸術創造拠点の整備等)
  - (8) その他
  - (9) 閉 会

## 会議記録

### (1) 開 会

### (2) 委嘱状交付

### (3) 挨拶

スポーツ文化局長より挨拶

### (4) 委員紹介

### (5) 事務局紹介

### (6) 委員長・副委員長の選任

### (7) 報告・意見交換内容

#### <① さいたま市文化芸術都市創造計画(前期計画)の令和2年度施策集について>

事務局 [資料2]さいたま市文化芸術都市創造計画令和2年度施策集を中心に説明

村上委員長 ありがとうございます。ただ今の事務局からの説明につきまして、ご意見、ご質問があればご発言いただきたいと思います。

小林委員 事前に資料をいただいて本当に多くの取組みが記載しておりすごいなと思った。これを見るときにそれぞれ施策や項目に分けて記載しているが、それぞれにどれくらいの予算がついていたのか、一緒に記載されていると、7つの施策の中で濃淡が分かるため、ありがたいと思った。

村上委員長 ありがとうございます。事務局いかがでしょうか。

事務局 貴重なご意見をありがとうございました。  
実はこの施策集もいままでの意見交換会のご意見をいただきながら、まとめていったものになりますが、この施策集で一区切りとなります。  
これからはまた新しい計画がスタートしていることから、またこのような施策集の形になるかは分からないが、今いただいた意見を踏まえて検討して参りたいと考えます。  
意見交換会でいただいたご意見についてはしっかり文書化をしまして、それぞれ関係する所管の方に反映するように依頼をします。これは教育委員会の所管の事業や各区役所が行っている事業もこの施策集の中に入ってきておりますので、皆様の意見を反映できるよう、事務局の方でまとめたうえで、依頼をするといったこととなっております。  
貴重なご意見をありがとうございました。

村上委員長 ありがとうございます。

議案事項があつてこれを決めるというわけではなく、発言をいただいてそれが回っていくので、皆様たくさん発言をいただいて、それが重要ですので、ご協力をお願いいたします。

それでは、他いかがでしょうか。

実際に参加されたり実施されたりしておられる方、こんなことがあったんだって、事業についてご意見がある方。

遠山委員

さいたま国際芸術祭2020のディレクターをやっておりましたが、内容を変更して実施していくこととなりました。去年でやった大きなイベントとしては横浜トリエンナーレとさいたま国際芸術祭ぐらいで、その他の芸術祭は中止もしくは延期となっております。我々も去年の3月というのは、どうにか継続し文化を体験できる機会を確保していくか困難でしたが、秋開催の時期は会場を無料に変更した。この判断は行政が主催しているから取りえた手段だと思っていて、非常に生活が困難な状況が続いている中で、文化芸術にお金を出そうというのは非常に困難な状況である中で、無料で何回でも体験できることは大きな意義だと思っている。何回も来られて助かったといった声があり、近隣のサラリーマンの方もお昼休憩に毎日のように訪れていた。当初僕が持っていたビジョンからは規模を縮小しての実施だったけれども、ある程度、コロナ禍といった大変な中では成果を揚げられたのかなと自負はしている。そして開幕する上では「Since2020」といった新しいメッセージを出したが、「2020から始めていく」、持続可能な芸術祭ないし文化芸術体験ができるかといったことをあの時は掲げたので、芸術祭が終わった後も、まだサポーターの事業でしたり、アーツセンタープロジェクトというものが続いてたりするので、そういう意味では大変でしたけど、よかったなと思っているところです。

村上委員長

ありがとうございます。ほかの委員はいかがでしょう。

関井委員

さいたま市美術家協会として、2020の周辺事業として参加予定だったが、残念ながらコロナ禍により我々の企画は中止となった。それは仕方がなかったと思うが、さいたま市美術家協会の市展は開催させていただきました。これは、文化振興課のご助力により、コロナ対応もしっかりできていて、おかげさまで展覧会ができました、ありがとうございます。なかなか一年前には難しかったと思うが、これからはこういったことがあったとしても、これからコロナが収束するか分からないが、今度はやっていけるような体制が必要なのではないかと思っている。そういうなかで、私も市

民として、国際芸術祭は市が宣伝活動を行っている中であんまり隅々まで伝わってなかったなと残念に思いました。そのあたりは次回に向けてより広く一般市民に広く開催していることが伝わっていくとなるといいのではないかと考えています。

村上委員長 公募委員の皆様、さいたま国際芸術祭に参加されたかもしれませんが、こんなだったよ、等があれば。

渋谷委員 参加していないのですが、さいたまってこんなだったのかと分かった。引越してきたのが、一年前で国際芸術祭も開催していたと思うが、市民として全く知らなかった。なので、どういうふう広報していたのか聞きたいのと、もうちょっと宣伝活動があるといいと思う。

小泉委員 私も芸術活動に関心を持って少しアンテナが立って、去年参加させていただいたが、私は市民として 2016 は知らなかったこともありますし、去年自分でやった企画展をやったが、来場された方や自分の知り合いに話をした時でも、芸術祭やってるの？芸術祭って何？など、知らない方がまだ多いなと思った。広報もそうかもしれないが、2016 から続いているサポーターの方達にお金もそうだが、脚光を浴びる機会をしつつ、市民参加型として素晴らしいことをやっていることを市民の皆様にも広められる方法は課題として一緒に考えていければと考えている。

村上委員 芸術祭、あるいは芸術はあるという、例えば京都なんかだと芸術があるために、芸術祭はないのかなと探したりしますよね、さいたま市って芸術祭やってるのかなって探す人はどれくらいいるんだろうって思いました。私は浦和市からの市民ですが、昔から市展があり芸術があるのかなと思いますけど、大宮の方は分かりません。そのさいたま市に関するイメージとアートが繋がらない、または小学校くらいにアートを体験しているのか、そんなことが市民の参加するかどうかに関わって来ると思う。代表的な例で言うと、極論ですが、フランスが始めた、18才までに芸術に携わるとその分のお金は出してあげますよといった、支援とかはこれからなのかもしれませんが、単にパブリックに支給するだけではなくて、別の仕組みの作り込みがこれから必要かなと思います。一方で、コロナ禍で実施されたのはかなり勇気のある行動だと思っています。なんせ学校なんか全部休んじゃえみたいなの、そういうのは抵抗が無かったんですかね。

遠山委員

私は特にそういうのはありませんでした。しかし先ほどの広報の話で、僕も芸術祭の広報のみで周知できるとは思ってなく、芸術祭のプロジェクトの中でコミュニケーションプロジェクトを重要視していた。プログラムの3割近くは地域にアーティストやクリエイターが入っていろんなことを展開していくもので、ただ、それがコロナ禍によってコミュニケーションをするなどまでは言いませんが、そのような状況になって、そのプロジェクトがなくなってしまった。それは僕がフルスペックで今回出来なかったといった残念なところで、広報に担ってもらおうといったところを強めているわけではないが、単純にいろんなところにチラシを置いていたり、テレビ、ラジオに出るといったことではなくて、どうやったら地域に染み込んでいくかといったことが非常に課題だと思っていたので、出来なかったのは残念だと思っています。

市橋委員

私も民間の立場で、様々な展覧会やイベントを実施してきましたけど、首都圏の中で広報や宣伝をすることは一番難しいんですね。例えば、億単位の事業予算で企画してもその中で広報予算はわずか。1億円のイベントに2、3千万円の広報予算をかける人はいない訳で、例えば都内とか埼玉県内で、一千万円の予算でどれくらい広報ができるかということ、知らないことはしょうがないことだと思う。全ての人に知られるためには、どれくらいの広報予算が必要ですかという話になってくる。そのために今、SNSなどを使って芸術やアートに関心を持つ人に向かって集中的に広報することをしていきますので、ある意味仕方がないかなと割り切るしかないかなと私は思っています。例えばさいたま市の広報誌にテニス教室があったとすると、その応募数はすごい。そこに興味がある人は広報誌でも見ているため、おそらく予算規模ではない。遠山さんがやられた芸術祭は見ましたが、素晴らしいですよ、でも関心のない人には素晴らしいことではないため、そういうことなのではないかなと。

もう一つ、私は教育委員会の社会教育委員もやらせていただいて、こうゆう施策集は生涯学習部も作るが、予算は記載するけれども実施された際の効果測定が記載されていない。参加者がどれくらいで、市民にどんなメリットがあったなど、第三者的な効果測定の記載がない。民間の立場だと何が効果測定かということ、民間の場合は収益なんですよ。そこしか見ない。やはり紹介されるのであれば、第三者的な立場でこんな実績があったなどの効果を記載しないと。せっかくの予算でこれだけやっているのに、一市民としては勿体無いと感じる。

村上委員長

ありがとうございました。

ちょっと進行上の理由で、もうちょっと意見があったら戻って期待と思いますが、次に報告・意見交換内容(2)について事務局から説明をお願いしたいと思います。

<② さいたま市文化芸術都市創造計画(令和3～12年度)の重点施策について>

(次回さいたま国際芸術祭、アーツカウンシルの創設、美術館等文化芸術創造拠点の整備等)

事務局

[資料2]さいたま市文化芸術都市創造計画(概要版)及び[資料3]さいたま市総合振興計画実施計画(抜粋)、[資料4]第3回さいたま国際芸術祭概要(想定)、[資料5](仮称)アーツカウンシルさいたま基本構想素案(要約版)を中心に説明

村上委員長

ありがとうございました。総合振興計画の説明がありましたけど、その中で「文化」の章が新しく出来たということでした。一つ気をつけなければならないのが、文化財の保存という話と、我々が今している文化芸術を活性化する、活性化という表現がいいのか分かりませんが、すでに活性化してますからね、ですが、その話とはごっちゃにしない方がいいと思います。何故かという、文化財の保護・保全は少し仕事が変わりますから。なので文化の活性化とか文化をいかに地域に定着していくのかといった意見をいただきたい。そしてその為に、文化芸術都市創造計画があってその計画の中で、重点的なものは3つあるというお話でした。国際芸術祭を充実させるにはどうしたらいいか、アーツカウンシルを創設する話はどう思いますが、文化芸術創造拠点を作ることにしての、拠点を創設する前にどう考えればいいのかということです。

それでは、私は3つのうちこれについて意見を言いたいと、発言が3つの中でまとまらなければ、総合的な議論をしたいといったふうで、まずはご自由に意見をお願いいたします。

国際芸術祭の開催はいかがですか。市民はどんな役割を担うのでしたっけ。遠山委員はいかがですか。

遠山委員

第3回目をやることには賛成ですが、国際芸術祭をこうやるべきというのは言いません。ただ、僕が大事にしてきたことは2016、2020と続く中で抜本的に芸術祭のコンセプトを変えようとしなかったことです。さいたまにはそれが合わないとか定着しないと思うんですけど、2016の継承とそれをどうアップデートするかといった、それに徹していたような気が

するので、それを続けていただくと良いのではないかとそんな気がしています。

その上で、アーツカウンシルが必要だと思ったのが、いわゆる行政とアーティスト、市民、制作サイドの中継ぎ、翻訳、編集をする機関が必要だろうと、それは僕がやっていたことでした。アーツカウンシルそのままのものにさいたまが合う合わないはあるかも知れないが、必要だと思っている。一方で、さいたま市は様々な人材、コミュニティー、活動があり、その多用性に驚いた。例えば道後温泉がアーティストにレジデンス型支援を行っていますよね。そういった人材に来てくださいというよりは、ここにいる人材を掘り起こしていくか。人材育成はこのプロジェクトの重要であるが、外より中にいるものをどう掘り起こしていくか、さいたまは人材の宝庫だと思っているので、アーツカウンシルの人材育成と連結していくのもありかなと思っていました。先月まで東京芸術祭に関わっていて、そこは人材育成に力を入れており、一つの部門を作っている。それは様々な芸術祭でも目下の課題となっているが、僕がさいたま市には人座的ポテンシャルがある都市だと思っています。

村上委員長

市民参加の特色ある芸術祭についていかがですか。

関井委員

アーツカウンシルも含めて、国際芸術祭のターゲットはだれかということです。私の考えとしては、ターゲットは市民です。

広報にお金をかける以前の問題としてさいたま市は、鑑賞者教育をしていないんじゃないかと。これは学校教育を見ればお分かりになるかと思うが、芸術の時間というのは高校一年時のみで、芸術分野の学校教育に関しては減らされている状況がある。そういう世代、つまり今の30代から40代くらいの世代に関して、芸術分野に関心の薄い可能性があります。まずは社会教育の問題で捉えるべきであろうと思います。一方で、人材を育成するには市民自体を教育する必要がある。アーティストの人材も教育であろうと思います。

アーティストというのは、勝手に作品を作ってきて発表すると勘違いされているが、それだけでは社会に認知されづらい。社会に認知されるためには、アーティストの周りに必ずキュレーション活動を行う人がいる中で、アーティストは育っていき、一流になり発表できるようになるのが現状。大学ではアーティストを育てますが、アーティストが一流になるまでは育てません。実のところはアーティストは社会の中で存在はしていますが、分かりやすい例でいうと漫画家と編集者の関係で、我々はアーティストを

作ることは作りますが、どういうふうに社会に影響があるのか、それなりに考えてはいるけれども、具体的にどのように社会に浸透させるかアーティストは分かってない。水面で活動するようになるとターゲットのために作品を作るようになるため、そこら辺はわかってくるようになるけれども、今さいたま市で課題なのは、美術学校に通っている、もしくは出ている人材はいるが、さいたま市の芸術祭や芸術文化活動に積極的に参加しているとは思えないことである。

さらにいうと、さいたま市にいる美大生がさいたま市のアーツカウンシルの中で、彼らをサポート、キュレーションする人間とあった場合に、彼らはそこでアーティストになる道を学ぶことになります。そこで彼らがさいたま市でアーティストとして育っていきます。そしてさいたま市を出て世界から評価を得て、さいたま市の評価が上がると思っています。なので、これは社会教育なのかなと私自身は考えます。

ですから、さいたま国際芸術祭で子どもたちを対象にしたものをやるとします。当然ですが、お父さんお母さん来ます。30代40代、50代の人もあるかもしれません。そうしましたら、SNSで子供のことを発信しますよね、そうやって広がっていくと思います。ですから、どうターゲットを設定していくか、何を育てていくかを明快にしていくと自ずと形が出てくると思います。

#### 村上委員

ありがとうございます。

さいたま市にはポテンシャルはあるに決まっている。なので、それをどう育成していくか考えていかなければならない。

似たようなものは、観光でもあります。古い観光資源がありまして、それは一応人を集めるのですが、実際の興味を持って見て感動する対象は実は違うんですね。例えば、東京のメインの観光資源は皇居あるいは相撲だったりするわけですが、しかし外国人がきて一番感動するのは渋谷の駅前交差点なんです。そういうふうにずれちゃうってことなんです。そういうようなことをどのように整合して、アートを管理するわけではなくて、アートをみんなの注目する対象にしながら、それを育てていくといった活動が必要じゃないかとそれが遠山委員のおっしゃりたいことだと。

その時に関井委員が言ったのは、そういう場合にコアになる人はこういう人だと、それは例えば、美術系の大学生であったり、教育学部で美術をやっていたり、あるいはデジタルアートをやっていたりする人はいっぱいいる、運動としてアートをやっている人は絶対いる。その中でターゲットを決めて、そのターゲットを決めたら育てていって、それを輩出する活動が



必要だと。でもそれは学校教育ではないのではないかと。ロンドンクラフトアートみたいなイメージですか、おそらく。そのような活動をアーツカウンシルがやっていく、というようなことが起きると、派生効果が生まれるといったことがおっしゃっていて、それは、そこを見に来た人・参加した人がこれは面白いと言って、例えば SNS で発信するといったことで、次のステップに世の中が移っていく。平等にやるのではなくて、コアを決めて波及効果をマネジメントするといった方式はどうかと言ったお話だと思うんですが、皆さんご意見いかがでしょうか。

関井委員

もう一点追加させていただきたいと思います。

実際に育てるアーティストなり鑑賞者を育てるということは、すでに実装されていると思います。それは美術館がそうですね。社会貢献するために学芸員が美術館で教育活動をされると思います。彼らはキュレーターという役割なのですが、鑑賞者に対してもアーティストに対しても必要な本当の意味でのキュレーターを作ること、市民を見据えてアーティストと共に育てるキュレーターを育てていくといったシステムが必要ではないかと思っています。これは、現実的に動いていくと思います。

村上委員長

今のお話は、まさにそういう方向ではあると思うんですが、一つ聞いていいですが。だれがキュレーションするんですか。

関井委員

多分ですが、学芸員ができますよ。美術館の学芸員は、昔は研究しかしませんでした。今の美術館の学芸員は社会教育の方にも重点を置いていて、現代の作家を扱うことをする。言ってしまうと、それはキュレーションを行なっていくことなので、現実的にはそのように向かっていくと思います。

村上委員長

分かりました。ものの見方は一方的なものでなくて、芸術の作り方に関与していくと言った見方になっていくと捉え方を基に、学芸員がそのような方向に向かっていくと。現実的なキュレーションを基に、そのような活動が、アーティストを育てると言った論理に結びつくであろうというお話だと思います。

関井委員

実際にもうやっていますよね。我々自身がそうです。

村上委員長

観光の話でいうと、例えば、地面に筒を入れると、地面の中から年代ごと

の縞ができるんですが、あまりにも学術的なすぎるので、それがどうやって博物館で人々に理解されるかといった話があります。それは、そのものの価値を話すのではなくて、それを見てどう思うかというところで逆に発想して、そのものの価値に到達すると言った、学芸員がそういった説明をすと言った活動です。芸術も一緒に、芸術家と一緒にこれが過去の芸術だとそういった話ではダメだという話だと思います。

関井委員

実際にやってきた話というと、私は金属で人体を作る作品を作っております。金属で古風な作り方というか、あまり世の中にはないようなものなんです。展覧会をやりましょうと言ったお話になると、どのように展覧会をやるか、実際の会場が渋谷の西武で、そこで何をやりましょうと言った私の作品をただ持ってきただけ、それはそうじゃないだろうと。じゃあ一体何をやろうと、渋谷を新しい文化拠点したいため、渋谷の西武でやりたいというクライアントは、世の中にあまりない金属の人体彫刻であれば、展覧会の会場をギャラリーではなく、店舗にしよう、と言ったことをやっていくんです。そしてエレベーター周りに作品を置いて置くと言った突拍子のないものを行っている、実際には店舗の中のギャラリーにも置いていくんですが、キュレーションを行う人間が店舗の中や渋谷警察署などにも様々な交渉を行っていく。そういうことをやりながら作り上げて、企画展をやっていく。作家はつくる人なんです。どうしたら、何をここでしたいか、作家一人で作るものではなくて、キュレーターと共に作り上げていくものです。

企画展が反響を呼べば、アーティストは上に上がっていく、キュレーターがいれば、その場所の知名度が上がっていく話題性が上がる、そういう経験があります。

また、先程いった学芸員にはネットワークがあります。ネットワークをお使いになって、アーティストを上手く使って教育活動が上手くいく。

アーティストは自分勝手です、お金が足りないと平気で言います。でもそうじゃないだろうと寄り添っていく人間が必要だと思います。やりたいことは分かるけど、もうちょっとこういう風にやれば、この町の人には理解されると思うよ、そういった伴走者としてのキュレーターは専門職ですが、さいたま市でも眠っているのではないかと。

村上委員長

さて、関井委員のお話がありましたが、いかがですか

市橋委員

お話しがずれてしまいますかもしれないんですが、中身をつくる専門化がいる

一方で、さいたま国際芸術祭には有識者がいるというお話でしたけど、外回りの専門家はいるのか。行政がやる場合に、予算は確保して、チケットが売れた、飲食が売れた、グッズが売れたといっても、外部収入に関しての配慮の仕方が違う。それを抜本的に変えていかないと。民間の発想では10億かかるものをリクープするためには、どれだけ人を入れればいいのかという、そういう発想をする。そのために紅白でYOASOBIが歌った、それだけで皆さん見ているので、説明の必要がない。展覧会やる上で、新聞社やテレビ局の人間は目玉が何かってことを必ず聞くわけです。そういう意味で中身を創る専門家はきっちりやっていただきながら、外部の専門家が宣伝や運営をどうお金をかけずにやっていくのか、一つ一つのプロフェッショナルを入れないと、なかなかこれだけの芸術祭で行政の方がその部分の説明をするのが難しいと思う。

村上委員長

話が広がってきました。ほかはいかががでしょうか。

吉原委員

非常に勉強になりました。行政が作るものは非常に体系的につくられていて、この部分を説明してといたら細部まで説明できるんでしょうけど、先ほどあったとおり、何が目玉なのか、広報でも見出しになるものが必要であると思う。さいたま市は130万人と大きいので、誰かが旗を振って心を動かすのは難しい。さいたま市は大宮と浦和の引っ張り合いがあり、市庁舎や、歴史もそうだと思いますが、国際芸術祭を実施しようとするとハコがある大宮や浦和が中心となると思うが、さいたま市全体でみると見沼たんぼや岩槻など周辺の区が非常に充実している。これは他の政令市ではないことだと思う。私は見沼大用水の東縁と西縁が本当にいいところだと思っていますが、市内を縦断して利根川まで、新潟では越後妻有の芸術祭がありますが、それを見沼たんぼでやるとか、荒川もある桜区など、会場として使い手がある。区を盛り上げたいといった思いがあることが、各区からボトムアップですれば130万人ができるのではないかと。外からではなく中だけでエネルギーが出る気がしますので、アーツカウンシルにしても区ごとに旗振っていくような、それぞれの核となる施設、組織、人材がたくさんあるといったお話もありましたが、そういった単位で組織についても考えていって、最後はメイン会場が大宮や浦和となるとしても、外から呼ばなくても成り立つ市民の芸術祭になれば関心を持って見に来てくれるのではないかと、そう思います。

村上委員長

他にいかがでしょうか。

浜副委員長

わたしも芸術劇場や埼玉会館など現場をしておりますため、令和2年度に国際芸術祭を実施した陰で苦労は想像に難くありません。現場でもコロナの中でどうやって行くのか、そもそもコロナで、芸術文化って必要なんですか、ということ正面から突き付けられたような気がしています。国際芸術祭もアーツカウンシルも、文化芸術創造拠点もそうですけど、必要なんですかね、正直コロナで人が集めるということを否定されている状況の中でどうなんですか、って突き付けられたようで、活動も出来ませんでした。そのような中で、7月にコンサートを実施したが、来場されたお客様では喜んでくれました。新聞でも取り上げられましたし、不思議なことに、運営についての意見は色々ありましたが、公演をやったことに関してお叱りは一つも来ておりませんでした。

こういったことから、芸術文化は必要なんだろうと、そもそも論で申し訳ないのですが、ターゲットを決めて、とか収益は大事だが、税金をかけてこういったことをやっているといったことは、そもそも皆さんに理解していただかないといけない。ある一定の関心のあるところのみにやれば、リピーターも増えるし、収益は上がっていくことは目に見えているが、それはその通りなのだが、それでいいのかということ常々考えている。公共劇場はどうするのかというと、観光や地域振興でいうと関係人口を増やしていく、といった発想があります。これはぐるぐる回っていくだけではなくて、実際知ってもらい、ちょっと聞いてもらい、地域にこんなのあるんだっていうきっかけを作っていく、実際に芸術文化は高いので、人形も鉄道もそうですけど色々な人がいる、知らない人には全く興味がない。そういう人にも税金でいろんなことをやっている理解を頂くためにどうするかといった努力はこれからさらに重要になっていく。県も国も非常にお金がなくなっている中で、実際に目の前に苦しんでいる人がいるのに芸術文化ではないだろうと意見があるのも事実、ただ必要性は否定されていないので、その中でどのような形で理解をいただいていくか、市民参加型の国際芸術祭も微妙になってくると思いますし、アーツカウンシルも専門的で難しいんですが、市民にアプローチするためには重要、文化芸術創造拠点についても、こういった活動を広げて、関心のない人であったとしても、いいんじゃないの、やってよかったと思うファンにするためにも、こういった意見や活動が必要なのではないかと思います。

村上委員長

ありがとうございます。他には。

坪内委員

3つの事業について、鉄道についても置き換えてみても、委員長がおっしゃった歴史保存の話含めて、博物館の使命だと考えている。多くの人に来ていただくべきだと思いますし、鉄道事業の文化拠点であるべきで、調査研究といった次世代の方たちの礎になっていかないといけないと思っている。我々と同じことを悩んでいると考えていて、我々もコロナによって文化事業がどうかといったことを突き付けられる側ではありますが、生物学的にはあまり必要がないと思われるところもあるかも知れないが、人間として社会包摂活動や哲学の中では絶対に必要だと皆様が思われたことだと思います。また、先ほどさいたま国際芸術祭がどんなものかといった話の中で学芸員の話もありましたが、私も学芸員として、本当にアーティストだけではなくて、アートマネジメントであったり文化事業をマネジメントする人が市民の中からピックアップしたり、育てていく必要があるなど考えています。また具体的な手法として、我々も悩んでいることがあります。やりたいことが似ておりますので参考になればと思いますが、SNSとかデジタル化とか時代が変わってきている最中なのかなと感じています。SNSと言われて博物館としても頑張っているが、インスタグラムは皆さん10代とか20代の女性がやられていると思っていませんか、実は30代とか40代の女性が一番多かったです。なので、そういうちょっとしたズレといいますか、そういったものが届かない原因になっている可能性があります。そこで基本的なものは実施設計するなかで査定すればいいと思うが、次世代の事業や広告でSNSやデジタル化といった言葉で止まってしまっていては実施する段になってズレを生む可能性があるのです。計画を策定するときから具体的にデジタル戦略や、次世代の戦略を考えていった方が良くと思います。実施が3年後なので、それはより進んでいるのかなと思っております。

村上委員長

ありがとうございました。他はいかがでしょうか。

渋谷委員

コロナで芸術活動をする上で、これって本当に今必要なのかなっていう気持ちを抱いて不安になっていたところ、なのでさいたま市は芸術をエッセンシャルと思っていると、市から打ち出していただけると、さいたまってアートの市なんだってすごい引き付ける要素になると思います。やはり国もエッセンシャルワーカーという医療従事者で芸術のことは軽く見られてると感じるので、市としては守っていくよという姿勢があると、芸術活動している者としては心強いなと思います。また興味関心がある人以外にどうしたら理解してもらうのはすごい大きな課題ですが、どうやったら

いいかまだ分かっていない状況です。

村上委員長

気が付いてことがあって、私の観光の分野では旅行に行くことがとめられたんですね、旅行をしてコロナが広がるのもどうかと思って、その中で生まれたものにオンラインツアーというものがある、オンラインでどのかの場所へ行ける、現地の人以案内してくれるというので、結構流行ってみんなが見たんです。でもオンラインツアーをもっと流行らせるためにはどうしたらいいかといったら、現地のを我々が手にとること。例えば、何とかの里のみかんを送る、我々はみかんをたべながら里の話を聞くというのがすごい良いということになったんですね。ところが一方で、ある財団の研究によると、オンラインツアーでみんな見ちゃったから行かないといったことが起きた、でもこれは観光の領域にとっては嬉しいことで、見たい人だけが来るから。僕は芸術でもこれはあるんじゃないかと思えます、芸術祭がみんなよるようになったら、そのためには鑑賞と創作の両方を教えないといけない、だけどそれは、天秤じゃなくて富士山になっているので、富士山の上の方の人たちは、もっとしっかりと精緻なものを手にしたい、本当の愛と真髓を手にしたとか今動いているものを手にしたいとか、そんなような人もいるでしょう。

結局、観光地がなんでみかんを送るかという、食べてほしい人がもう一回着てくれる、そういうような動きを創ることが、コロナ間に僕たちが一生懸命やったことです。あと越後湯沢の話で面白かったと思ったのは、目玉を創るという話で、目玉をつくとみんなもちろん目玉には行きますよ、でも必ず「反目玉」という人が世の中にはいるんです。でもそのようなヘソの曲がった人がいるから、その観光地に幅が出てくる、そして面白さもどんどん出てくる。だから、どうやって仕事をしましたって成果を出すことは非常に重要なんだけど、成果に合わせて公共事業がそれを出すと、その周りに新しい動きがでてくる、それが僕の話の動きを創るってのがこのアートでもすごい重要で、アートが止まってしまったら、アートは動いているそれで人を動かしている、それが起こった時におそらく公共性を持つんですよ、だから人はそれを不必要とは言わない、そういうことが今回のコロナで証明された気がします。

なので、おそらく、市民参加型だからこそ、あんなこといってる、間違っているよ、という意見が出てきている、しかしそれが初めてアートをアートらしくするし、アーツカウンシルが気を付けてそういう人たちをフォローしつつもコアをしっかり育てる。そのことをアーツカウンシルがやっていく意味では責任は大きいなと思います。

いかがでしょうか。

小林委員

2点、国際芸術祭とアーツカウンシルについてです。

国際芸術祭は、本当にいたるところで開催されていますよね。ですが、大多数の国際芸術祭は、観光と結びついて普段人がいかないところに仕掛けるといったことは非常に多いんですね。で、さいたまでやっているものは、どうしても隣に東京があっていわゆる文化芸術活動は、さいたまの市民の方にとってみれば東京にアウトソースしているような状態ですよ。そういう近隣でやるっていうとてもチャレンジングで、ほかに類を見ないことをやっていて、その点でとてもすごいなと思って、私も実に行っていたんですけども、それを逆にイニシアティブにするような内容で、市民参加という言葉も、たぶんそれぞれ皆さんが創造する市民参加は違うと思うんですよ、その市民の方の作品を発表するのが市民参加なのか、企画をやるのが市民参加なのか、会場で田んぼの話が出たときに、土を掘るのが市民参加なのか、全然分からないので、その部分売りをしていくのがいいのかなと思いました。

もう一点、アーツカウンシルについてですが、これはアーツカウンシルにいましたので、その立場から意見を言いますと大変厳しい職場です、なぜならば、そういう仕事をしたときに定職がないんです、で例えば PD、PO とかでマネジメントする立場の人もほぼ非常勤です。世の中のアーツカウンシルを調べて頂ければそれはすぐにわかるんですけど、で、今お話しがあったような、大きな役割を担ってもらうのはいいんですけど、それなりの人件費といえますか、人的な負担、お金の負担、それとその人たちが何年後どうなるのかといったキャリアとしてアーツカウンシルも考えて行かないと、いわゆる、日本にいくつかあるアーツカウンシルの中でも、前は東京にいて、今は横浜、次は新潟に行くといった人しか実際はいないので、そういうキャリアのひとつにさいたまも入るのかどうなのか、考えた方がいいと思います。

村上委員長

ありがとうございました。これはまた機会を作って議論したい気がしますね。ちょうどお時間になりますが、最後になにかございますか。

新井委員

成果というものを求められていて、対してやったことと偶発的にやった後にでてくることもあるんだけど、費用対効果というか、その結果が1000円で仕入れたものを2000円で売れば、1000円儲かるといったこともあるし、

教育という数値で図らないものだと思うのでそこは目をつぶってはいけないこと、子どもを育てるとかアーティストを育てるとか、比較していくスキームの中でのやり方の重ねていくことを大事だと思います。

先ほどの副委員長のそもそも論も私たちも考えて、実はわれわれは流しびなをやる時、問い合わせが来てやるんですかと、こんなときにやるんですかといった意味を含めた問い合わせがありました。規模を縮小してやったんですけど、今広報をどうしようかとなりまして、皆さんたくさん来てくださいと言えないわけで、やることの告知、なんでやるのかということを引きちんと知らしめるというか、人形のまち岩槻で流しびなをやる意味を知らしめていったんですけど、自粛をしていくといろんなことやらなくて、何が原点なのかということを考えて、非常によかったなと思いました。しかし、やってはいけないといわれて控える中で、やらないことになれる、次に腰をあげるのが大変なのかと、それぞれのエキスパートが部署部署でそだってきて、彼らの頑張りですべてイベントができるんですけど、どっかかけると難しい状況になってきて、これからはオミクロン株が出てきて再開すべきか、縮小すべきかというところで、デジタルに頼っていろいろ変わって来ているそれが本当にいいのかなという気もするし、人形は実物見て貰いたいし、ネットででてくると本当の見え方と変化していてこれちがうんだよなところこともあるし、告知とか SNS とか使うべきだと思うんですが、広げていくのは仕掛ける人というか、見た人が拡散している訳で、興味あるところに飛ぶんだろうなという気がしています、こういったいろんな文化的な活動とか芸術とかどうしていくかというところに来てるんだろうなと思います。

村上委員長

ありがとうございました。それでは、もうちょっと時間があれば盛り上がるんでしょうけど、終了となります。皆さんのご意見や皆さんに助けられながらここまで来ました。どうもありがとうございました。

## (6) その他

事務局より報酬及び会議概要についての説明

## (7) 閉会

さいたま市スポーツ文化局文化部文化振興課

電話 8 2 9 - 1 2 2 6

Fax 8 2 9 - 1 9 9 6